

地方だより

富山地方气象台



富山地方气象台表側より

“薬売り”で知られた越の街、富山は“越中じゃ立山、加賀では白山”と唄われる通り、立山連峰の麓に開けた米どころ越中平野の中央にあって、3000mの山々の眺めはカトマンズにも比較されるが、その立山も今では電車、ケーブルカー、バスと日帰りで登山でき、その上、山の温泉にまでつかって帰れる時世になった。

東側に北アルプス連峰、北西方に能登半島を控えた富山湾の冬は日本海の荒波とは思えない程に静かである。春ともなれば富山湾の名物は“ほたるいか”と蛸気楼である。蛸いかは深海に棲んでいるが、産卵のために海面近くまで浮び上がってくるのだという。深夜の海中で怪しいまでに光る光景は竜宮の宴うたげもかくやと思わせるに充分である。また紅葉の黒部溪谷と、富山県を訪れる観光客は年々その数を増している。

いま富山県として、大きな話題は新産業都市の指定である。富山港と伏木港の間に4万トン級の船舶を横づけに出来る新山新港を新設して、富山、高岡の両市を結んで一大産業都市を建設しようとする計画である。時世の変わりばは農業県を工業県に変えつつある。富山県には河

川が多い。富山県の歴史を繰れば昔は全く水との戦いであったと云っても過言ではないが、お蔭で旱魃凶作がない。今ではこれらの河川の上流には無数の発電所があり、更に有峰、黒部の大ダムをはじめ幾つかのダムが築かれ、従来は無駄に流された豊富な融雪や洪水を調節して、総発電力は全国の首位に迫っている。この電力と用水が工業を大きくバックアップしている。

富山地方气象台の歴史は新しく、昭和13年に富山側候所が新設されたが、その位置は神通川の左岸、富山駅から徒歩で30分程の処にある。構内の敷地は約8000平方米、庁舎は古びてはいるが、鉄筋コンクリートの平家建てであって昭和20年8月1日夜の大空襲の時は職員の懸命な努力で現在の庁舎の火災をまぬがれた。昭和35年に現業室も新築され、20名近くの職員が日夜働いている。特色は電力気象の中核業務をもっていることで、夏は北陸三県を対象とした雷雨予報をやっている。昨38年には富山空港が新設され、富山の空も忙しさを増してきた。水と雪に明け暮れた越中路も立体的に拡るにつれて气象台の姿も大きく変わろうとしている。(波多)



富山地方气象台より眺めた立山連峰